横浜市立 浦島小学校　　学校評価報告書　　（ 令和　4　～ 6 年度 ）

重点取組分野	令和　4　年度 具体的取組	令和　4　年度 自己評価結果	総括
授業改善	①他者との関わりを通して合意形成していくことができるように、コミュニケーション力に焦点をあてた研究を推進していく。その中で、話合い場面やグループでの学習場面など、視点を明確にして研究を深められるようにしていく。 ②子どもの思考の深まりを促す効果的なICT機器、特にタブレットの活用ができるように、日常的に活用場面を試行錯誤しながら授業に臨む。	①「コミュニケーション力」という本校の資質・能力の視点に立って、単元計画をつくり、話し合い等の手立てを考えながら授業を行うことができた。また、算数科の系統性と資質・能力のかかわりについても考えることができた。一方で、算数科だけでなく、様々な教科・領域の関わりの中でコミュニケーション力は高まっていくため、その評価が難しい部分があった。 ②年度当初に情報教育計画を提示し、各学年に合わせたICTの活用場面を設定することで、学習場面での使用頻度が多くなり、効果的な活用をする子どもの姿が見られるようになってきた。一方で、教員のICT使用の実態に差が見られ、定期的な研修や活用状況のチェックを行っていく必要性を感じた。	B
豊かな心	①児童の人権意識を高められるように、人権の指導計画の充実を図る。 ②互いのよさを認め合い、自己肯定感を高めることができるように、身に付けさせたい資質能力を明確にしたたてわり活動を行う。 ③自己肯定感を意識した教育活動を進めていけるように、カリキュラムマネジメントを推進する。	①浦島丘中ブロックで指導の内容を検討し、各学級で人権目標を作って掲示したり、その目標に沿って振り返りをしたり、委員会主催であいさつ運動を行ったりと、9年間を見通した指導計画に基づいて活動を進めることができた。 ②各学年で身に付けさせたい資質能力を明確にして活動を計画、実行してきた。グループで一つの旗を作るなど、協力して取り組む活動は有意義であった。より一層6年生のリーダー性を高めたり、グループの仲を深めたりできるよう、必要な時間確を確保したり、指導を充実させたりすることが必要である。 ③めざす子ども像に迫るために、教科の系統性や他教科とのつながり、他学年とのつながりを意識し、学習内容と関連付けて指導した。子どもたちのがんばりを認め、自信をもって何事にも取り組めるよう指導した。	B
健康安全教育	①心身の健康に対する意識を高められるように、すくすく会議を年2回行い、健康課題を把握する。 ②体力の向上を図ることができるように、体育の学習をより一層充実させていく。 ③自らの安全を確保するための判断力や行動力を育成できるように、ねらいを明確にした避難訓練を行う。	①すくすく会議では、子ども達の課題意識を生かして年間テーマを「手洗い」と設定した。校内放送やイベントを企画したり、全校児童参加型のすくすく会議を実施したりして、子どもが心身の健康に対する意識を高められるよう指導を工夫することができた。 ②教科担任制の良さを生かし、学習カードの活用、場の工夫など、児童がめあてを明確にし、その達成に向けた学習を展開することで、運動を楽しむ子どもが育っている。 ③各学級でめあてを意識した指導をすることで、子どもが自らルールを守って訓練に参加することができた。	B
地域学校協働活動	①地域や人を大切にしようとする気持ちを育むことができるように、総合的な学習の時間や生活科の学習の中で、地域の材を生かした単元づくりや多様な方々との関わり合いを大切にしていく。 ②地域の材をより一層生かした学習ができるように、学校運営協議会を年3回開き、教育活動への理解をいただいたり、地域学校協働本部との連携をより一層深めたりする。	①学年に応じて、どんぐりを使ったおもちゃづくりを地域の方に協力していただいたり、自然を生かした遊びをつくって幼稚園の友達に遊んでもらったり、イオンでの販売活動を行ったりするなど、地域や人との関わりを大切にした活動をつくることができた。 ②学校運営協議会では、中期学校経営方針の説明、子どもたちの様子や教育活動の様子の報告、子どもたちの授業参観、次年度の学校運営についての説明などを通して、学校の教育活動にご理解をいただくことができた。また、学校の環境整備や学習の準備を地域学校協働本部の方にしていただき、教育活動の充実を図ることができた。今年度、地域学校協働本部の活用の仕組を整えることができたので、次年度以降、持続可能な形にしていきたい。	B
いじめへの対応	①児童一人ひとりを丁寧に見取り、いじめを生まない学級、学年、学校の風土をつくり、未然防止に努める。 ②いじめの早期発見・早期解決ができるように、定期的に児童へのアンケートや面談を実施し、情報収集や学年研での情報共有に努める。 ③組織的な対応を行うことができるように、認知したいじめ案件をその都度、また、月1回の対策委員会・職員会議で情報共有し、学校全体の問題として解決していく。	①担任だけでなく全職員で日常的に児童の様子や変化を気にかけ、情報交換をすることで、いじめを生まない風土づくりや未然防止に努めることができた。 ②定期的に児童へのアンケートや面談を実施し、集めた情報を学年研で共有することで、いじめの早期発見・早期解決につなげることができた。 ③月1回の対策委員会に全職員が参加し、情報共有を行って、いじめを学校全体の問題として捉えるとともに、組織的に対応していく意識を高めることができた。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①授業力・学級経営力・学年経営力・児童指導・支援に関する力を向上できるように、教科分担制を取り入れたり学年研を充実させたりする。 ②授業力や教員としての資質能力を高められるように、全教職員が関わりながらメンター研修を行う。 ③時間を有効に活用できるように、会議内容や方法の精選、見直しを図る。	①教科分担を取り入れることで、学年の子どもたちを指導していくという教師の意識が向上した。また、日々の指導について情報交換することで、授業力・学級経営力・学年経営力・児童指導、支援に関する力の向上を図ることができた。 ②メンター長が活動の工夫を考え、全職員が大きな負担なく関わることができるようにすることで、メンター全体の授業力や教員としての資質能力を高めることができた。 ③授業時数の工夫や会議の内容の見直しを図ることで、放課後の時間を有効に活用することができた。会議の方法については様々なやり方があるため、浦島小に合ったやり方を今後も検討していく。	B
特別支援教育	①基礎学力の定着や居場所づくりができるように、さわやか教室で、支援が必要な児童への個に応じた指導を行う。 ②SCやSSW、通級指導教室や東部療育センターとの連携を密にする。 ③継続的な支援を実現できるように、個に合った指導・支援計画を作成する。	①例年よりも早くさわやか教室を開始したり、個に応じた目標を立てて毎月の学習に取り組んだり、家庭と連携したりすることで、子どもの基礎学力の定着や居場所づくりにつなげることができた。 ②様々な専門家に児童の様子を見てもらい、アドバイスを活かしながら教育活動を行う事ができた。 ③複数の職員で確認しながら指導・支援計画を作成することで、継続的な支援を実現することができている。	A
児童指導	①YPアンケート・プログラムを活用し、学年や学級の風土づくりについて話題にしたり、児童の実態に応じた具体的な取組を実践したりする。また、関係機関の協力を得て、本校の状況に合わせた研修を充実させる。 ②児童指導年間計画に基づき、全校でぶれのない指導を行っていくことができるように、学年研などで児童指導年間計画に基づいた振り返りを行う。	①YPを活用し、学級や学年の風土づくりや取組について、複数の教職員で検討する支援検討会を年2回行った。また、検討会を踏まえ、個や集団への支援を実践した。研修を通して、YPについての理解を深めることもできた。 ②学年研で児童指導年間計画の振り返りを行ったり、児童指導部会や専任から指導事項を発信したりして、全校でぶれのない指導を行っていくことができた。	A
ブロック内評価後の気付き	○中学校と小学校の授業を互いに見合う研究会を3年ぶりに実施することができた。各教科、領域ごとにブロック内で子どもたちに育てたい資質能力や中学校に進学するまでに小学校で子どもたちに身につけさせたい力等について共通理解を図ることができた。 ○児童生徒交流日に、6年生が中学校での授業や部活動を実際に体験することができた。6年生の児童が中学校生活をイメージし、意識を高めることにたいへん有意義であった。 ○小中担当者会で、各校の取組や状況について情報交換し、連携することができた。自校の取組に生かすことができた。		
学校関係者評価	たいへんわかりやすい形で学校評価の結果がまとめられている。時間外の研修に参加している教職員の学ぶ意欲はすばらしい。 自己肯定感はただ高いだけでなく、自己肯定感と合わせて謙虚さや悪かった時に「ごめんなさい。」が言えることも大切であると思う。 児童も教職員も「ありがとう」の感謝の気持ちを伝えられることもすばらしい。 教員不足や教職員の働き方に注目が集まっている中で、教職員の働き方についても考えていかなくてはならない。子どもたちと日々、直接かかわる教職員にゆとりが生まれ、生き生きと子どもたちと関わっていくことが大切である。時代とともに、教育活動も変わっていく。改革していくことはたいへんなエネルギーが伴う。模索をもって改革し、子どもの育ちが変わらないようにしてほしい。生活・浦島の時間の取組については、単元構想図をつくってここまでやっている学校は少ない。さらに、教職員同士で互いにやっていることを共有し、学校全体として取り組んでいってほしい。		
中期取組目標振り返り	全学年で教科担任制をとり、全校の児童の成長を全教職員で支えていく体制や教職員の意識の醸成はできている。教職員不足やコロナ等の影響から、教職員が欠けてしまう状況があったが、それを教職員同士で互いにカバーし合い、日々の教育活動を行ってきた。カリキュラムマネジメントの工夫を行い生み出した時間を、日々の教育活動の充実や児童の成長にしっかりとつなげていきたい。引き続き重点研究やメンター研修等の充実を図り、教職員一人ひとりの授業力や児童指導力等の向上に努めていきたい。地域学校協働本部の活動を本格的に進めることができた。今後も、さらに地域コーディネーターやかめの子サポーターの方々のお力をお借りしながら、教育活動の充実につなげていきたい。		

重点取組分野	令和　5　年度 具体的取組	令和　5　年度 自己評価結果	総括
授業改善	①他者との関わりを通して合意形成していくことができるように、コミュニケーション力に焦点をあてた研究を継続して推進していく。各教科の話合い場面やグループでの学習場面など、視点を明確にして研究を深められるようにしていく。 ②子どもの思考の深まりを促す効果的なICT機器、特にタブレットの活用ができるように、引き続き日常的に活用場面を試行錯誤しながら授業に臨む。あわせて教職員のスキル向上に努めていく。	①コミュニケーション力に関するアンケートで、児童・保護者とも「できた」「ややできた」が8割を超える結果になり、日ごろから教員が資質能力をベースとした授業をめざけている成果だと思われる。次年度は、発達段階に応じたよりよいコミュニケーションの在り方について、教員と児童との共通理解をより深め、さらにコミュニケーションの質を高めていきたい。 ②Ipadの効果的な活用を常に意識して授業を行った。夏休みにICTを授業でどのように活用できるか教職員研修を行ったり、外部の研修の案内などを情報部が発信したりするなどして教職員のスキル向上に努めた。さらに、スマイルドリルを試験導入するなど、タブレットをより効果的に活用できるよう日々努めている。	B
豊かな心	①児童の人権意識を高められるように、人権の指導計画のさらなる充実を図る。 ②互いのよさを認め合い、自己肯定感を高めることができるように、身に付けさせたい資質能力を明確にしたたてわり活動を行う。 ③自己肯定感を意識した教育活動を進めていけるように、カリキュラムマネジメントを推進する。	①人権教育実践推進校として、浦島丘中ブロックの各小中学校と連携してYPプログラムを活用して人権教育の推進に努めた。 ②6年生のリーダー性を高めたり、グループの仲を深めたりできるよう、必要な時間を確保し、充実したたてわり活動を行うことができた。各学年で身に付けさせたい資質能力を引き続き意識した指導を行っていきたい。 ③他の教員と協働しながら校内研究に取り組み、日常的にカリキュラムを確認した。どの場面でどのようなカを高めていくのか実践を通して考えることができた。その結果、「自分のよいところがわかり、友達を大切にすることができた」児童が84%、そのような子どもの姿を実感している保護者が92%となった。引き続き、互いの良さを認め合う場面を設定したり、相手のことを尊重できる雰囲気づくりを行ったりすることを積み重ねていき、効果的な指導や支援について共通理解を図っていきたい。	B
健康安全教育	①心身の健康に対する意識を高められるように、すくすく会議を年2回行い、健康課題を把握する。 ②体力の向上を図ることができるように、体育の学習をより一層充実させていく。 ③自らの安全を確保するための判断力や行動力を育成できるように、引き続きねらいを明確にした避難訓練を行う。	①子ども達が自分たちで話し合い、今年度のテーマを「姿勢」と設定し、クラス毎に話し合ってめあてを決めて必要な取り組みを行っている。子どもたちの心身の健康に対する意識を高められている。 ②教科担任制の良さを生かし、学習カードの活用、場の工夫など、児童がめあてを明確にし、その達成に向けた学習を展開することに努めることができた。運動を楽しむ子どもが育っている。 ③年間を通して「自らの安全を確保するための判断力や行動力」を児童・教職間の共通のテーマとし、めあてを明確にした避難訓練の実施に努めた。	B
地域学校協働活動	①地域や人を大切にしようとする気持ちを育むことができるように、総合的な学習の時間や生活科の学習の中で、地域の材を生かした単元づくりや多様な方々との関わり合いを大切にしていく。地域の材の活用方法や各学級の取組状況など、教職員間での情報共有をさらに進めていく。 ②日々の教育活動の充実を図るために、学校運営協議会を年3回開き、教育活動への理解をいただいたり、地域学校協働本部との連携をより一層深めたりする。	①コロナ禍の影響で、地域や人との関わりが少なくなったが、少しずつ交流する機会が増えてきている。久しぶりに幼保小の交流を行い、低学年児童の相手意識を高めることができたことは成果であった。今後はさらに、単元づくりについて研修を行うなど、単元づくりや地域や人と関わった学習のあり方について共通理解を図っていく。 ②学校運営協議会では、委員の方々と学校運営について話し合ったり、子どもたちの様子を見ていただいたりして学校の教育活動にご理解をいただくことができた。また、地域コーディネーターを中心に環境整備や学習支援などをしていただき、教育活動の充実を図ることができた。地域学校協働本部の持続可能な、よりよい組織の在り方について今後も検討していく。	B
いじめへの対応	①児童一人ひとりを丁寧に見取り、いじめを生まない学級、学年、学校の風土をつくり、未然防止に努める。 ②いじめの早期発見・早期解決ができるように、定期的に児童へのアンケートや面談を実施し、情報収集や学年研での情報共有に努める。 ③組織的な対応を行うことができるように、認知したいじめ案件をその都度、また、月1回の対策委員会・職員会議で情報共有し、学校全体の問題として解決していく。	①研修等を通して、一人ひとりを丁寧に見取る意識を高めることはできた。さらに、個々の教員の学級経営力を高め、いじめを生まない風土づくり、未然防止に努めていく。 ②児童アンケートや児童面談・日々の見取りを通して、いじめを認知する等、早期発見・早期対応につなげることができた。 ③いじめが起きた際、学年や専任と情報を共有する体制が整い、情報共有することができた。全職員でいじめの案件について共有し、学校全体の問題として解決したり見守ったりすることができた。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①授業力・学級経営力・学年経営力・児童指導・支援に関する力を向上できるように、教科分担制を取り入れたり学年研を充実させたりする。 ②授業力や教員としての資質能力を高められるように、全教職員が関わりながらメンター研修を行う。 ③教職員の心身のゆとりを生み出し、日々の教育活動の充実や子どもたちの成長につなげていくことができるように、教育活動や業務の精選、見直しを図る。	①教科分担制を取り入れたり、学年研を充実させたりできたことで、学年として児童の指導・支援にあたることができた。授業力・学級経営力・学年経営力の向上を実感できる職員が増えた。今後も継続していく。 ②学級経営力を向上するために、各教員が継続的な取り組みを行い、児童が安心して生活できるように努めることができた。メンターの一人ひとりが自ら学ぶ姿勢をもち、プレゼンテーションを行い、よりよくなるよう検討しながらブラッシュアップに努めることができた。体育の実技研修では、メンター以外の教職員も参加し多くの職員で指導力向上に努めることができた。 ③カリキュラムマネジメントや業務の精選、見直しを図ることで、教職員個々の裁量ある時間を生み出すことができるよう努めている。引き続き、子どもたちの成長や教育活動の充実につなげていきたい。	B
特別支援教育	①基礎学力の定着や居場所づくりができるように、さわやか教室で、支援が必要な児童への個に応じた指導を行う。 ②SCやSSW、通級指導教室や東部療育センターとの連携を密にする。 ③継続的な支援を実現できるように、個に合った指導・支援計画を作成する。	①さわやか教室での「できた」という体験が支えとなりクラスでの授業も頑張れている児童が多い。 ②様々な専門家に児童の様子を見てもらい、そのアドバイスを活かして支援をよりよいものにすることができた。 ③確実に指導・支援計画が引き継がれ児童の成長につなげていけるように、作成時間を設定し、教員が連携して指導・支援を行うことができた。	A
児童指導	①YPアンケート・プログラムを活用し、学年や学級の風土づくりについて話題にしたり、児童の実態に応じた具体的な取組を実践したりする。また、関係機関の協力を得て、本校の状況に合わせた研修を充実させる。 ②児童指導年間計画に基づき、全校でぶれのない指導を行っていくことができるように、学年研などで児童指導年間計画に基づいた振り返りを行う。	①YPアンケートをもとにした支援検討会を年間2回設定し、学級風土を話題にしたり、具体的な取組を考え実践したりすることができた。 ②児童指導年間計画をもとにしたり、専任が共通理解を図ったりして、全校でぶれのない指導を行うことができた。学年での検討や振り返りは学年主任のマネジメントのもと、より充実させていきたい。 今年度、「安心して学校に来られている」という児童が86%で、そのような児童の姿を実感している保護者が94%であり、全体的には高い割合であった。全ての児童が安心して通える学校をめざしていきたい。	A
	b9		
	b10		
ブロック内評価後の気付き	○中学校と小学校の授業を互いに見合う研究会を今年度も開催し、本校が小学校を代表して授業を公開した。各教科、領域ごとにブロック内で子どもたちに育てたい資質能力や中学校に進学するまでに小学校で子どもたちに身につけさせたい力等について共通理解を図ることができた。 ○児童生徒交流日に、6年生が中学校での授業や部活動を実際に体験することができた。6年生の児童が中学校生活をイメージし、意識を高めることができた。 ○小中担当者会で、各校の取組や状況について情報交換し、連携することができた。また、人権教育の推進ブロックとして連携して取組を行うことができた。		
学校関係者評価	学校評価アンケートの評価の視点が、児童、保護者、教職員で統一され、わかりやすい文言になった。それに伴い、報告書もコンパクトにわかりやすくまとめられている。 時代の変化に合わせて、デジタル化を取り入れたり、教育活動や宿題の在り方を見直したり改善していくことは必要なことである。 一人ひとりの学力の伸びが見られるのは、子どもたちの努力はもちろんのこと、教職員の授業改善やカリキュラムマネジメントの成果でもある。 学校が困っていることがあったら、地域でできることはできるだけ協力していく。		
中期取組目標振り返り	横浜市学力学習状況調査では、学校教育目標の「自ら学ぶ子」に関連する「学校での学習に進んで取り組んでいる」と回答した児童の割合は58.2%（市57%）で市の平均を超えている。また、本校で育成に力を入れているコミュニケーション力に関連する「自分の考えを、相手にわかるように伝えている」と回答した児童の割合も60%（市55.4%）、「学級の友達と話し合う活動を通して、自分の考えを広げたり深めたりしている」と回答した児童の割合も、46.8%（市43.2%）で市の平均を上回っている。昨年度の調査と比べて学力を伸ばした児童の割合は、国語82.5%（市77.8%）、算数70%（市67.9%）と市の平均を大きく上回っている。学校評価アンケートでは、「お子さんは安心して学校に通えている」という項目については、94%の肯定的な回答、「お子さんは自分のよいところがわかり、友達を大切にすることができている」については、91.9%の肯定的な回答をいただいた。また、「安心して学校に来られている」と肯定的な回答をした児童は、86.2%だった。引き続き、全ての児童が安心して通うことのできる学校をめざしていく。		

重点取組分野	令和　6　年度 具体的取組	令和　6　年度 自己評価結果	総括
授業改善	①他者との関わりを通して合意形成していくことができるように、コミュニケーション力に焦点をあてた研究を特別活動を中心に行っていく。 ②ICT機器、タブレットの活用を効果的に行い、児童の意欲や学力の向上につなげる。あわせて教職員のスキル向上に努めていく。		
豊かな心	①児童の人権意識を高められるように、人権の指導計画のさらなる充実を図る。 ②互いのよさを認め合い、自己肯定感を高めることができるように、「Y-P」を効果的に活用し、身に付けさせたい資質能力を明確にした学級、学年活動やたてわり活動を行う。 ③自己肯定感を意識した教育活動を進めていけるように、カリキュラムマネジメントを推進する。		
健康安全教育	①心身の健康に対する意識を高められるように、すくすく会議を年2回行い、健康課題を把握する。 ②体力の向上を図ることができるように、体育の学習をより一層充実させていく。 ③自らの安全を確保するための判断力や行動力を育成できるように、引き続きねらいを明確にした避難訓練を行う。		
地域学校協働活動	①地域や人を大切にしようとする気持ちを育むことができるように、総合的な学習の時間や生活科の学習の中で、地域の材を生かした単元づくりや多様な方々との関わり合いを大切にしていく。地域の材の活用方法や各学級の取組状況など、教職員間での情報共有をさらに進めていく。 ②日々の教育活動の充実を図るために、学校運営協議会を年3回開き、教育活動への理解をいただいたり、地域学校協働本部との連携をより一層深めたりする。ボランティア募集を地域学校協働本部を窓口として行えるようにする。		
いじめへの対応	①児童一人ひとりを丁寧に見取り、いじめを生まない学級、学年、学校の風土をつくり、未然防止に努める。 ②いじめの早期発見・早期解決ができるように、定期的に児童へのアンケートや面談を実施し、情報収集や学年研での情報共有に努める。 ③組織的な対応を行うことができるように、認知したいじめ案件をその都度、また、月1回の対策委員会・職員会議で情報共有し、学校全体の問題として解決していく。		
人材育成・組織運営(働き方)	①授業力・学級経営力・学年経営力・児童指導・支援に関する力を向上できるように、教科分担制を取り入れたり学年研を充実させたりする。 ②授業力や教員としての資質能力を高められるように、全教職員が関わりながらメンター研修を行う。 ③教職員の心身のゆとりを生み出し、日々の教育活動の充実や子どもたちの成長につなげていくことができるように、教育活動や業務の精選、見直しを図る。教職員の働きがいを高める。		
特別支援教育	①基礎学力の定着や居場所づくりができるように、さわやか教室で、支援が必要な児童への個に応じた指導を行う。 ②学校として組織的な対応を行うとともに、SCやSSW、通級指導教室や東部療育センターとの連携を密にする。 ③継続的な支援を実現できるように、個に合った指導・支援計画を作成する。		
児童指導	①誰もが安心した学校生活を送ることができるように、「Y-P」などを活用し、多面的な児童理解に努め、学年や学級の風土づくりについて教職員間で情報共有し、児童の実態に応じた具体的な支援、指導を実践する。 ②児童指導年間計画に基づき、全校でぶれのない指導を行っていくことができるように、学年研などで児童指導年間計画に基づいた指導の共通理解や情報共有、振り返りなどを行う。 ③教職員間での情報共有を密に行い、児童支援専任を中心として、組織として対応をする。		
	c9		
	c10		
ブロック内評価後の気付き			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			